

## 「イラク主権移譲についての動静と課題」

宇都宮大学 国際学部 国際社会学科 1年 常川久幸

### 1、はじめに

中東の一國、イラク。人口2400万人ともいわれるこの国で2002年、ある戦争が巻き起こった。『イラク戦争』。世界中を轟かせたこの戦争は、人々に様々な意味をもたらした。特に、戦後の今を生きる若者たちにとっては記憶に残る、最初の新しい戦争だった。多くの人を注目させ、出向かせ、ついに2003年5月1日、ブッシュ大統領の戦闘終結宣言により、幕を閉じたかに思えた次の瞬間、人が亡くなった。人が倒れ、また倒れ、とどまることを知らないように死者が多発。6月28日、事実上の主権移譲となったが、市民の不安には変わりなかった。この国はどうなり、そしてどこへ行くのか。これは、私が追いかけたイラクの現状とこれからの課題を綴った、未来への報告書である。

### 2、これからの流れ

突然のことだった。当初6月30日に予定されていた主権移譲が、急きょ繰り上がり、2日前の28日にとてもしなやかに行われた。理由は、暴動が発生しないための治安の問題だという。このように、『治安』が問題視されている中、何とか予定通り事が進むとしたら、このような計画がすでに用意されている。主権移譲の後、まず最初に行われるイベントが7月中に実施される予定の国民会議である。これは、国民1000人~1500人ほどの人から選出された100人で構成される、諮問評議会の発足を目標としている。この評議会は、ヤワル大統領やアラウィ首相らが率いる暫定政府を補佐する役割があり、国民の期待も高いと思われる。そして、2005年1月までにビックイベント、450以上の政党が名乗り出るといって『総選挙』を実施し、暫定国民議会を発足させる。また、この議会からは移行政府（暫定政府の次の段階）に何名かが選出され、日本でいう、政治を握る与党が結成されるという。そして、その年の12月15日までに新憲法が起草され、12月末までに暫定政府から正式な政府へと生まれ変わることが出来るのだ。これが、事実上の終止符であり、これと同時に多国籍軍といわれる、治安維持に当たっている各国の軍隊が引き上げることになっているのだが、この『多国籍軍』が双方の悩みの問題となっている。これについては後ほど述べたい。つまり、このように一応の目途は立っているが、様々な問題も浮上しているのは事実である。その大きな問題が、「治安維持」なのである。この大切な『治安』を守るのが多国籍軍なのだが、反対意見も数多い。一体、多国籍軍とは何者なのか。なぜ、これまでに必要視されているのか。これを、次で考察したい。

### 3、多国籍軍

多国籍軍とは、国際紛争や内戦を解決するため、国連安全保障理事会の呼びかけに応じ

る形で、各国が自主的に部隊を派遣して結成する軍である。これまでも結成された例があり、1991年に勃発した湾岸戦争でも活躍した。今現在、世間が多国籍軍を懸念する理由の一つが、おそらく“武力行使を行うか”ということであろう。多国籍軍の目的は『国連安保理決議1546』に明記されており、国連平和維持活動（PKO）に近い活動が予定されていて、武力行使を伴う治安維持活動のほか、自衛隊が行っている、給水・医療支援などの人道復興支援も任務とされている。自衛隊の多国籍軍の参加理由として、自衛隊が活動を続けるためには好都合と政府は説明しているが、具体的にはイラク政府が主体となっているので、地元の支持も得やすいということである。また、活動内容としても、これまでと変わりはなく、引き続き援助物資の輸送などを請け負う形となっている。では、なぜこれほど問題視されるのか。一つに、イラク地元住民の主張として、軍隊が留まるということは、今までと変わらない占領と同じではないかという意見が多く根強い。武力行使も使うということで、自分たちより権力が高いという見方もある。バグダッドのナハレイン大学教授の話では、“治安維持のため多国籍軍の当面の駐留はやむを得ないとイラク人の多くが考えている。しかしこの決議（国連安保理決議1546）は、多国籍軍の行動に関してイラク側に明確な主導権を与えていない。人々の強い反感を軽減できないし、占領軍の駐留を許しているとして、暫定政府への信頼感を損なう恐れがある。”としている。多国籍軍の活動には、明確な実績開示が不可欠だと私は考える。イラク地元住民に納得のいく活動を展開してほしい。また、自衛隊の活動に関しては、日本国民への情報開示が欠かせないと思う。

#### 4、「主権」の内容

主権移譲といっても、では一体何を“移譲”するのか。ここでは、主権について様々な各国の主張をみていきたい。一般的に、大きな二つの主張が対立している。一つは米英の主張であり、“イラク統治の責任と権限を暫定政府に委ねる”としている。これは、注目の天然資源についてはノーコメントであり、一部では“治安維持”の責任を暫定政府に押し付けているとの見方もあり、中途半端な主張はあまり受け入れがたいという人が多い。一方の今回のイラク戦争を支持していなかった独仏中口の主張としては、“社会的基盤をはじめ、天然資源なども完全に移譲”としている。今回のイラク戦争の勃発原因の疑惑とされている天然資源だけに、注目度の一つとされているが、大切なのは今回の国連の回答だと思う。国連は、あくまでも主役のイラク国民の納得する決議をだしてほしいと主張している。アメリカは大統領選を間近に控えて焦りが見えているようにも思えるが、これはイラクの将来にかかわることである。衝突はなるべく避けた決議を私は望む。

#### 5、これからの課題

今まで、一通りの形を主張してきたが、ここではこれからのイラクに必要なものを述べていきたい。課題としては、やはり『治安回復』は避けられない。“国とは人である”。こ

それは、私が今まで様々国へ行くたびに実感してきた、大きな不動真理である。国とは法律やシステムだけではない。それは単なる形作りで、本質は一人一人の国民である。国民が暴れると国は麻痺し、国民が動くと国も動く。当たり前がそこにはある。当たり前が真実なのである。国民を納得させることができ、いかに国民の心を正しい方向へ向けるかが焦点ではないかと思う。このことが、多国籍軍の活動にも影響することは間違いないだろう。国連決議が実際に機能できるような国際社会の態勢を早急に作り、イラク国民の幅広い支持を得ることが大切である。そしてもう一つ、今のイラクには必要なものがある。それは、“自信をもつ勇氣” だと思う。自分たちにもっと自信を持ってほしい。何とかしたいと思っても、空回りで終わってしまい、周りは悪化する一方。あきらめないでほしい。なぜなら、独立を勝ち取ったあなたがいるのだから。イスラム社会の長所、団結を合言葉に頑張っている。このような国には、私たちが想像しないようなパワーが隠れているのである。

## 6、おわりに

事実上、予定されていた主権移譲の6月30日は、実は私の誕生日でもあった。どんな人でも誕生日というのは、自分を見つめ直すときでもあり、また新たな路が繋がるときでもある。国も同じである。イラクは今、イラク人自身のイラクへ向けて、とにもかくにも歩みだした。それを見守る私たちには、何が出来るだろうか。新たなる時代のページが開かれる今、もう一度ゆっくり考えてみるべきではないだろうか。そして、少しでも早く、イラクが満月を見つけられる日を私は楽しみにしている。

---

<sup>1</sup> 『国連安保理決議1546』

6月8日に全会一致で採択された文書。6月末までのイラクへの主権移譲を承認する。2005年12月までに新憲法に基づく正式政府を発足させる。多国籍軍の駐留は正式政府発足、またはイラク政府の要請により終了する。(石油収入をプールとする)イラク開発基金はイラク政府が管理する.....などを骨格としている。